

飛騨高山

残したい

想いと風土



高山市
国府町

阿多由太神社 宮司

加藤 織衛さん

はるか昔からこの土地の人々を
見守ってきた阿多由太神社
祭や禊ぎが無事行えるのも
人との繋がりのおかげなんやさ



地域の人と共に

高山市国府町に産まれた
加藤織衛さんは、「阿多由太
(あたゆた)神社」12代目の
宮司を務めています。

獅子舞や鬃鶏楽が奉納され
る例祭や、季節ごとの祭りを
はじめとして、先祖を祀(まつ)
る「祖霊祭(それいさい)」、
冬の川に入る「禊(みそぎ)
など、年間を通してさまざま
な神事を奉仕しています。

また、宮司の後継者が少
ない中、近隣の12の神社を
掛け持ちしているため、特
に祭が多い春や秋は忙しく
過ごしています。

神社の息子に生まれ、幼
い頃から父について祭事に
奉仕してきたことで培われ
た地域の人との繋がりが、
今も日々の支えになってい
るといいます。

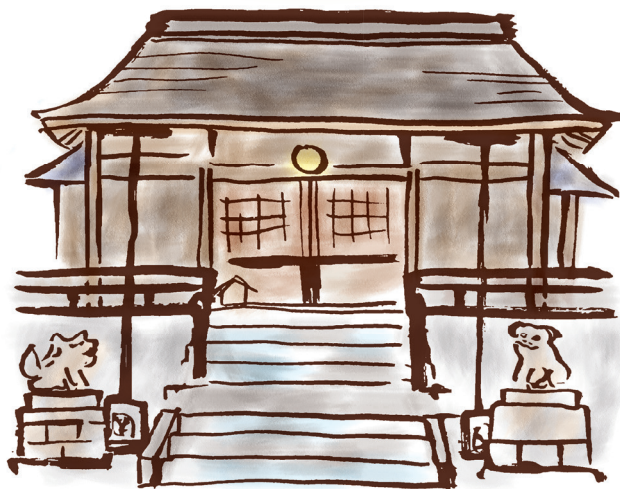
阿多由太神社

創建年代は不詳

本殿は室町時代に作られたと
推定されています



国府町にある木曾垣
内・三日町・半田の3
地域の産土神(土地の
守護神)として古くか
ら崇敬されています。



まきど
巻戸橋

現在は行き来しやすくな
りましたが、かつて
は橋がなく、集落から
離れた神域の雰囲気
をまとう場所でした。

12代続く 宮司のルーツ

寛永9(1632)年、初代熊本藩主・加藤清正の孫である加藤光正が高山藩
主の金森重頼にお預けとなり、そして光正の妹・重姫が阿多由太神社に隠
れ住んだと伝えられています。重姫と高山へ来た家臣の加藤宗賢が、阿多
由太神社の鍵取りになったことが、宮司のルーツだといわれています。

地域とともに守る 大切な神事



毎年12月30日

みそ

禊ぎ

1年の厄落としや新年の無病息災を願う神事。男性は下帯にはちまき、女性は白装束で、真冬の冷たい水につかります。氏子だけでなく県内外からも参加者が訪れます。

「素盞男（すさのお）神社」で2年間経験をつみ、地元に戻ってきて父を手伝うようになりました。

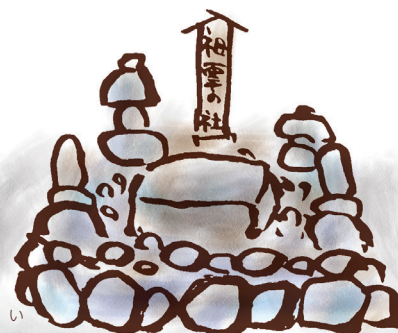
年を重ねると、こどもの頃に父を手伝って良かったと思うことが増えました。

また、12月30日には神社の前にある荒城川で禊ぎ神事が行われます。氷点下の厳しい寒さの中、冷たい川へ入り、願いを込めます。

毎年9月1日

そ れ い さい

祖霊祭



亡くなって50年経った人を、地域の氏神様となってもらうためにお祀りします。本殿横の祖霊舎には、昔の風習の名残で、河原の石に名前を書いたものが敷き詰められています。

神社の息子に産まれて

小学校1年生のころから、宮司の父について、お祭りで玉串を渡すなどのお手伝いをするようになりました。当時はまだこどもだったので「友達と遊べなくて嫌だな」と思っていました。

高校卒業後の進路を決める時にも神学を学ぶことは考えませんでした。父に神職の資格だけでも取って

はと勧められ、「京都國學院」で厳しい修行も経験しながら2年間学びました。

卒業後は名古屋にある

「素盞男（すさのお）神社」で

2年間経験をつみ、地元

に戻ってきて父を手伝うよう

になりました。

年を重ねると、こどもの

頃に父を手伝って良かった

と思うことが増えました。

地域のみなさんが小さい頃から知ってくれているおかげで、親しみを持って関わることが出来ます。今では息子も神職の資格を持ち、手伝ってくれています。

祖霊祭と禊ぎ

例祭の他にも、さまざまな神事があります。

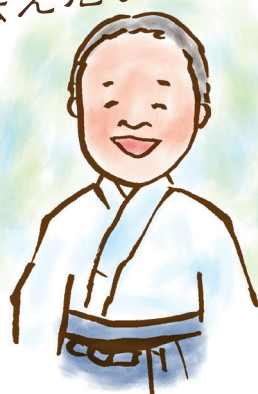
9月1日の夜には、亡くなった方を本殿横の祖霊舎にお祀りする「祖霊祭」を行います。ぼんぼりを灯し、地域の人が集まって祈りを捧げたあとは、輪になって先祖と一緒に酒をいただきます。

また、12月30日には神社の前にある荒城川で禊ぎ神事が行われます。氷点下の

厳しい寒さの中、冷たい川

へ入り、願いを込めます。

いま、
伝えたいこと



神社はどこも後継者不足、お祭りも少子化で難しくなったけど、老若男女が協力できる大切な場やでな。獅子舞では一軒一軒まわらず、集まってもらうなど、工夫をして続けとるよ。鬨鶏楽や舞を練習する場でこども同士が遊ぶのも、縦や横のつながりを学べる貴重な経験やと思う。そうやって祭りに参加した思い出を持った子が大人になって、いつか自分のこどもを連れて神社に来てくれるようになったらうれしいな。